

「聖地」アンブヒマンガをめぐる人類学的研究

—マダガスカル「観光地」における諸実践—

平成 26 年入学

派遣先国：マダガスカル共和国

江端 希之

キーワード：聖地、社（やしろ）、王霊・精霊祭祀、憑依、越境、西インド洋、宗教実践

対象とする問題の概要

本派遣で調査対象としたアンブヒマンガ（アンブヒマンガの丘の王領地）は、メリナ王国（16 世紀～1897 年）の王宮跡や王墓が建つ「聖なる丘」を中心として、周辺の複数の聖地や集落から構成される（Scott, 2003）。首都アンタナナリヴの北部近郊に位置し、2001 年にはユネスコの世界文化遺産に指定された。

アンブヒマンガはイメリナ地方（メリナ人居住地域）の「12 の聖なる丘」のひとつであり、その中でも最も名高い聖地である。そして、「ドゥアニ doany」⁽¹⁾と呼ばれる王霊・精霊祭祀の場所（ないし社：やしろ）が数多く点在している。このイメリナのドゥアニ信仰はメリナ人だけのものではなく、憑依儀礼の一種「チュンバ tromba」を重要な媒介としながら、民族や国境を越えて、西インド洋の島々に広がっている。



アンブヒマンガの王宮（左）と王墓（右）



調査地での憑依儀礼チュンバのようす

研究目的

アンブヒマンガは国内外から観光客と巡礼者が訪れる観光地・聖地であり、ゆえに、アンブヒマンガをめぐる諸実践を明らかにすることが、マダガスカルにおける民族・国家・宗教の重層的な関係性の解明へ繋がると考えられる。中でも本研究では、ドゥアニ信仰の中心的聖地としてのアンブヒマンガに注目する。

ドゥアニ信仰はマダガスカル「伝統宗教」の枠には収まりきらない、現在進行形で形成されつつある宗教実践である（Blanchy, 2001）。そこで本研究では、聖地アンブヒマンガをひとつの

軸に据えながら、民族・国境を超えるドゥアニ信仰の実態と、それを支える社会関係や人間関係を明らかにし、そこで生じつつある宗教実践や「新たな伝統」を描き出すことを目的とする。



ドゥアニの社殿内部の一例。祭壇とピアンジュ



著名な聖地のひとつドゥアニ Mangabe

フィールドワークから得られた知見について

アンブヒマンガ周辺の5つの聖地⁽²⁾を始めとして、イメリナ地方の複数のドゥアニの個別調査を行った。その結果、著名なドゥアニには現在も、国内他民族や西インド洋の島々から巡礼者が多数訪れていることが分かった。また、サカラヴァ人など他民族の精霊を祭祀対象とするドゥアニの存在も確認した。チュンバで憑依した王霊に命令されて、小さな祠から立派な社殿に改築したドゥアニを複数確認し、生成・発展を続けるドゥアニ信仰の実例を得られた。

また、ドゥアニ信仰と基督教の共存と競合の諸相が浮き彫りとなった。同地住民のほとんどが基督教徒⁽³⁾であるが、基督教と並行してドゥアニ信仰を実践する者も多く、彼ら／彼女らは教会に隠れてドゥアニを訪れる。同地には「魔女 mpamosavy」と呼ばれる女性も多く居住し、教会とドゥアニとの間には、基督教とも民間信仰ともつかない信仰世界の広がりが存在することを再認識した。

ドゥアニ同士の「横の繋がり」は希薄で組織化に乏しいが、ドゥアニをめぐる職能者⁽⁴⁾らの社会関係・権力関係が複雑であることを確認した。



憑依した王霊の命令で新築された社殿



安産と子宝にご利益のあるドゥアニ

今後の展開・反省点

今回の調査はドゥアニの個別調査が中心だった。今後は人々の日常の関係性にまで深く入り込んでの調査もしていきたい。メリナ人は王国時代に貴族・平民・奴隷の身分階層を形成した。ドゥアニ信仰の構成要素である「宗教的職能者」「参拝者」「祭祀対象」の身分階層は一部で重なりながらもそれぞれ異なっているが (Graeber, 2007)、こうした絡まり合う社会関係を解き解す必要がある。

今後の研究で進展を目指す点は、①アンブヒマンガにおけるドゥアニをめぐる社会関係を明らかにすること、②ドゥアニの祭祀対象である王霊・精霊の流通・拡散の実態、③宗教的職能者・参拝者 (巡礼者)・祭祀対象・地域社会・国家・キリスト教の間関係性の解明、の3点である。

そのために、ドゥアニ信仰の中心地のひとつであるアンブヒマンガを定点観測しながら、他地域の複数のドゥアニの調査も進めていく。



祭壇で祈りの言葉を捧げるピアンジュ



著名な聖地のひとつドゥアニ Andranoro

注

(1) ドゥアニという用語は本来サカラヴァ人のもので、元タイメリナ地方では使われていなかった。しかし現在は、メリナ人の王霊・精霊祭祀の崇拝場所も全てドゥアニと総称されている。

(2) Mangabe、Ankazomalaza、Ambatondradama、Mahazaza、Amboatany の5か所。それぞれの聖地は、固有名を持つ複数のドゥアニから構成される。

(3) プロテスタント (FJKM) とカトリックが2大勢力で、その他にアングリカン、ペンテコステなど。非キリスト教徒はドゥアニ信仰の宗教的職能者の一部などに限られ、少数派。

(4) 著名なドゥアニには、ドゥアニを維持・管理し参拝者を迎える役目の「ピアンジュ mpiandry」と呼ばれる番人がある。その他、治療師、占い師、呪術師、霊媒、儀礼音楽師など、様々な種類の宗教的・呪術的職能者がドゥアニを出入りしている。これらの職能者の性別は、音楽師は男の場合が多いが、その他の職能者は男女ともに存在する。



憑依霊の命令で約 30 年前に建立されたドゥアニ



ドゥアニごとに祭壇の様相は異なる



聖なる池と祭壇（手前右）



巨石を祀ったドゥアニ（写真中央）



祭祀の場所のひとつ



『12 の聖なる丘』のドゥアニ Ambohidratrimo



Mahazaza のドゥアニのひとつ



Ankazomalaza のドゥアニのひとつ



ドゥアニ前で談笑するピアンジュと参拝者



Amboatany のドゥアニのひとつ



キリスト教との習合が進んだドゥアニ



水源もドゥアニになる



洞窟内に祀られたドゥアニの祭壇



祈りを捧げる巡礼者ら



どこかアジア的な風情のあるドゥアニ



Ambatondradama のドゥアニのひとつ



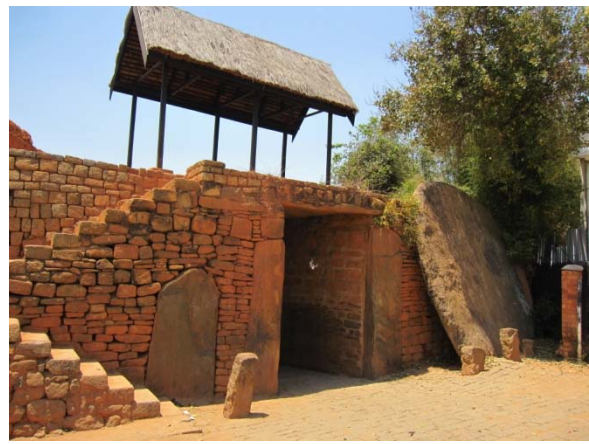
聖なる井戸の上に社を建てたドゥアニ



聖書が捧げられた王霊の休息所



アンブヒマンガ村のメインストリート



アンブヒマンガの門のひとつ

参考文献

- Blanchy, Sophie, Françoise Raison-Jourde, Malanjaona Rakotomalala (eds.) 2001. *Madagascar: Les ancêtre au quotidien, Usages sociaux du religieux sur les Hautes-Terres Malgaches*, L'Harmattan.
- Blanchy, Sophie, Rakotoarisoa Jean-Aimé, Beaujard, Philippe, Radimilahy Chantal (eds.) 2006. *Les dieux au service du peuple : Itinéraires religieux, médiations, syncrétisme à Madagascar*, Karthala.
- Bloch, Maurice 1993. *Placing the dead: tombs, ancestral villages and kinship organization in Madagascar*, Waveland Pr Inc.
- Estrade, Jean-Marie 1985. *Un culte de possession à Madagascar: le tromba*, L'Harmattan.
- Françoise Raison-Jourde 1999. *Social competition and the control of sacred places in rural Imerina: the case of Ankadivoribe*, in Middleton, Karen (ed.) 1999. *Ancestors, power and history in Madagascar (Studies of Religion in Africa)*, Brill, pp.283-318.
- Graeber, David 2007. *Lost people: Magic and the legacy of slavery in Madagascar*, Indiana University Press.
- Scott, Margaret 2003. *Change, continuity, and cultural identity : as traced through the people and place of Ambohimanga, Madagascar*, University of Oxford
- 花渕馨也 2006. 「海を渡るトゥンバーインド洋西域における精霊憑依」, 眞島建吉編『インド洋の十字路 マダガスカル』 pp. 106-116, 葫蘆舎